



宮原のつぶやき

～2月22日の全校集会校長講話より一部抜粋 機械トラブルで話せなかったので～特別版

先週の日曜日まで、中国の北京で冬のオリンピックが行われていました。フィギュアスケート、スノーボード、ジャンプ、カーリングなど、判定問題などいろいろな問題を提起しつつも、選手は熱戦を繰り広げていました。～中略～

でも、応援する私たちはどうしたらいいんでしょう？負けた選手の悪口を言うのではなく、選手の頑張りをしっかりと見て上げることが大事だと思います。また、負けて悲しんでいる選手を見たら、その気持ちを分かって上げるようにすることが大事なんだと思います。オリンピックって、見ている人にも気を付けなければいけない大事なことがあると思います。

今回のオリンピックでも名シーンはいくつもありませんでしたが、その中でも私はとても感銘を受けた2つの記事があります。

1つめは「男子フィギュアスケート」の羽生結弦選手の試合後のインタビューです。～中略～

「いやもう、一生懸命頑張りました。正直、これ以上ないくらい頑張ったと思います。うん.....まあ報われない努力だったかもしれないですけど。.....でも、うん。確かに、ショート（プログラム）からうまくいかないこともいっぱいありましたけど。むしろ、うまくいかなかったことしかないですけど。今回、でも、一生懸命頑張りました。」と、自分の頑張りを誇る清々しいコメントを残しました。勝ち負けにこだわらざるあまり、国民に謝ったり、後悔の言葉ばかり繰り返したりする選手が多いのですが、本当に精一杯練習の時から全力を尽くしたスポーツ選手というのは、本来こうあるべきではないかと感じさせられました。



2つめは「パシュート」という前回金メダルを取った種目です。決勝の最後の1周で転倒してしまい、残念ながらあと少しというところで金メダルを逃し、銀メダルという結果に終わりました。ネットでは転倒を惜しむ声や転倒した選手を批難する書き込みもあがっていました。その時、その場に居合わせた日本のカメラマンの大沼廉さんの1枚の写真が大きな反響を浴びました。

「私はセレモニーの間、とても悩んでいた。終了後に個別撮影するべきなのだろうか。3選手は表彰されている間、複雑な表情を浮かべ、特に菜那はあふれる涙を何度もぬぐっていた。その無念さ、悔しさを思い、私も目頭が熱くなる。～中略～

目を真っ赤にして肩を組み、ポーズを取る姿を見て、私はレンズを向けたまま、不覚にもぼろぼろと泣いてしまった。この日まで1年数カ月、短い期間だが多くの写真を撮らせてもらった。大会や練習、合宿、選考会。この舞台にたどり着くまで懸命に練習し、激走する彼女たちの姿を間近で見てきた。リザーブとして3人を支え続けた押切美沙紀（富士急行）も含めて素晴らしいと思うし、彼女たちにもそう思っただろう。しかしその思いは言葉にならず、代わりに涙となってあふれてしまった。とてもファインダーをのぞけない。「すみません」と言うのがやっとだ。



すると「いや、そっちが泣くのかー！力が抜けるわ」と目に涙をためていた3人は、涙顔のまま大笑い。私もむせびながら、どう撮ったか記憶が定かではないが、後でカメラを見ると満面の笑みが記録されていた。撮影後、別の競技会場へ移動する車中でカメラマンの先輩がこう声を掛けてくれた。

「あの時、おまえが声を掛けて写真を撮らなかったら、このレースで残るのは転倒の瞬間や涙に暮れる菜那選手など、悲しい写真ばかりだった。ここまで努力して、最後まで懸命に闘った選手たちもそれはつらいはず。ほんの少しだったけれど、彼女たちが心から笑顔になれる瞬間を残せた」

情けない姿を見せてしまったが、そのせいで彼女たちの心が少しでも和らいでくれるのなら、と願わずにはいられなかった。生涯忘れられないひとときとなった。」

選手の頑張りを見続けてきた大沼カメラマンだからこそ、その心に寄り添い、撮れたすてきな写真だったと思います。

今回、ぜひ三原っ子のみなさんにも、伝えたいと思った名シーンでした。スポーツはもちろん勝利を目指して頑張ります。初めから負けようと思って取り組んでいる人はいません。しかし、オリンピックは勝ち負けだけにこだわっている人ばかりではありません。勝ち負け以上に、自分のできなかったことやうまくいかなかったことに挑戦する気持ちも大切です。また、負けてしまった人の悔しさ・悲しさなどを、自分のことのように涙を流して一緒に寄り添うことができる人々の姿にも私たちは感動させられるのですね。ぜひその姿に学びたいなと感じました。みなさんもそんな三原っ子になってください。

以上で、私の話を終わります。

～長い話となった「宮原のつぶやき」でしたが、最後まで読んでいただき、ありがとうございました。～